

## 安井・梅原時代と

### 仙人・熊谷、天才・劉生

近代から現代へかけての日本洋画史の中で、昭和初めから凡そ30年を、史家は安井・梅原時代と名付ける。これは、安井曾太郎、梅原龍三郎ふたりの巨匠が図抜けた実力の持主であり、数多の画家が、大なり小なり影響を受けて夫々の画業を形成したからに外ならない。

当館では、ふたりの代表作と呼べる作品も含めて、人物・風景・静物夫々に所蔵がある。

安井は、色彩、線、画面構成による独自の画風を編出し、世に安井様式と呼ばれた。人物ではその安井様式を確立した頃の《モデル》、そして戦後の《腰かける裸女》があり、風景で安井調の色濃い《焼岳》、静物では器に桃の《卓上静物》、染付の中国陶磁に活けた《薔薇図》などがある。梅原は、豊かな装飾性と自在なフォルムによる絢爛たる画風を展開した。人物では戦前の代表作《裸婦鏡》、北京時代の《姑娘併座図》、風景では戦前の《桜島の朝》、

戦後の《浅間山》、静物では珍しい《薔薇図（黒バラ）》など多彩である。開館2周年に一八八八年生まれのふたりの巨匠の生誕100年記念展として「安井・梅原二人展」を、当館所蔵の29点に東京・京都両国立近代美術館などの協力を得て、全54点で開催し、好評であった。

同じ時代の他の巨匠に眼を移すと、先ず熊谷守一。お客さんが増えると困るから……と言って文化勲章を辞退するなど、日常の言動から「画壇の仙人」と称された。その単純化したフォルムと明快な色彩の画風は、凡そ真似手のない独自のもの。当館では、《斑猫》《群鶏》《小菊》《青柿》《蔵王》《向月》など25点の所蔵がある。熊谷と画壇の通ずる長老作家に坂本繁二郎がある。晩年は画壇を離れ、郷里で制作三昧、馬・能面・月と題材を変化させて幽玄の画境に到達した。館蔵ではそれぞれ《林間馬》《能面》《櫛の月》がある。

天折の天才画家としては麗子像で高名の岸田劉生。その作品の幅広さと画壇への影響力から、とても39才で没したと信じられない。

当館には風景の《道と電信柱》、静物の《諸果含秋》人物の《信行之像》などあるが、やはり麗子像である。《林檎を持てる麗子》《麗子微笑之立像》《麗子坐像》《笑ふ麗子》の四点

の麗子像は、メナードコレクションの誇りである。天折の天才としては中村舜の《婦人像》や三岸好太郎の《白馬と道化》などがあるが、ここでは佐伯祐三にとどめる。パリの街並みや静物などの滞欧作が注目されたが、日本での風景などの表現に挫折を感じて、病を押し

て再渡仏、広告や看板の文字を鋭いタッチで憑かれたように描き続けて僅か一年でパリの地に没した。30才であった。当館所蔵の《街角の広告》はその時の代表的な作品である。これまで、メナード美術館の開館25周年記念コレクション名作展のI〜Vの開催に従って、その内容を紹介してきた。今後とも何卒メナード美術館を愛していただけられるようお願いして筆を措く次第である。

(元メナード美術館顧問)



岸田劉生  
《林檎を持てる麗子》  
1919

開館25周年記念 コレクション名作展V

近代日本洋画 10/12/12/23